



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	顧太清と『紅樓夢影』
Author(s)	渋井, 君也
Citation	文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 49 (2018-01) pp.39-48
Issue Date	2018-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/2760
Rights	

顧太清と『紅樓夢影』

Gu Tai-qing and “Hong lou meng ying”

渋井 君也

Kimiya Shibui

要旨

『紅樓夢影』は清代の満州族の女性詞人、顧太清（西林春）が著した『紅樓夢』の続書である。先行研究では顧太清が自分の詩作や生活のモチーフを『紅樓夢影』の創作に溶け込ませ、また彼女の貴族夫人としての経歴及び写実的な作風は他に類を見ない特徴を有すると指摘されている。しかし、顧太清の『紅樓夢影』の構想の特色や彼女の人生がそのような特色を形成する際に与えた影響についてはさらなる考察が必要だと考えられる。本稿ではまず、林黛玉が登場しないという作品の特徴や買家の再興を支える男性の登場人物の描写について検討する。次に、顧太清が意識的に王夫人や史湘雲を活かして、薛宝釵のヒロインとしての核心的な地位や役割を大いに弱め、また顧太清による女性描写の主眼は十二釵の再構築に置かれ、林黛玉や薛宝釵が中心人物になるかどうかは、十二釵の成立に不可欠な条件ではないことについて考察する。最後に、買家の再興と十二釵の再構築こそが顧太清の関心の焦点であり、これらの描写を通じて『紅樓夢影』が才子佳人の小説から脱皮して貴族家庭の小説への転換を遂げたことについて指摘する。

●キーワード：『紅樓夢影』(Hong lou meng ying) / 顧太清 (Gu Tai-qing) / 続書 (conceptions)

I. はじめに

『紅樓夢影』¹⁾は清代の満州族の女性詞人、顧太清（西林春²⁾、1799-1877）が著した『紅樓夢』³⁾原著の後日譚の続書であり、現存する清代の『紅樓夢』の続書の中で最も遅く現れた作品で、女性作家により著された唯一の続書となる章回小説でもある。顧太清の祖父である鄂昌は清代の重臣の鄂爾泰の甥であるが、早年に家庭が思いがけない災難⁴⁾に遭い、26歳のとき、顧太清は乾隆帝の曾孫の多羅貝勒奕絵の側室に召された。顧太清の「湘佩三妹を哭す（哭湘佩三妹）」詩は凡てで5首あり、その中の1首に次のように詠っている。

「紅樓幻境原無據／紅樓の幻境もと據る無く
偶耳拈毫續幾回／偶耳に毫を拈みて幾回かを続ければ
長序一篇承過譽／長序一篇過譽を蒙り
花箋頻寄索書來／花箋頻りに寄せては書を求め來れり
自注：余偶續紅樓夢數回，名曰紅樓夢影，湘佩為之序，不待脫稿即索看。常責余性懶，戲謂曰：姊年近七十，如不速成此書，恐不能成其功矣。／自注：私が『紅樓夢』の続きを數回書き、『紅樓夢影』と名付け、湘佩がそれに序文を附してみたところ、脱稿してないうちから読もうとする。そして常に私の怠性を責め、

姉上は七十も近づいてきているのに、速やかにこの本を書き上げないと、功績を立てられなくなってしまうかもしれないよとからかうのである。」（『天遊閣集』詩7⁵⁾、引用原文の日本語訳は本論筆者による。以下同じ）

詩中の湘佩は即ち沈湘佩であり、『紅樓夢影』の序文の作者でもある。沈湘佩の序文は咸豐11年辛酉（1861）に書かれ、また自注には「姉上は七十も近づく」とあるから、『紅樓夢影』は顧太清の晩年に書かれたことが分かる。顧太清の祖先一族の境遇は、曹雪芹の祖先である曹寅一族と似ており、清代の権臣の官界での浮き沈みを経験していた。顧太清は早年のうちにそうした浮沈に巻き込まれていたが、後にやはり貝勒府に嫁ぎ、宗室との間に婚姻関係を結んだ。顧太清が『紅樓夢影』を創作する時、息子の載釗と載初はすでに輔国將軍に封じられ、孫の溥樞も鎮国公の爵位を世襲しており、彼女の晩年における家内での地位も『紅樓夢』の中の買母や『紅樓夢影』の中の王夫人を思わせるものがある。

顧太清は清代の『紅樓夢』続書の作者の中で経歴が最も明らかで、さらに周辺の事情を詳しく知ることのできる人物である⁶⁾。『紅樓夢影』は買家の再興を叙事の粗

筋とし、家族中の女性の活動を叙事の中心とする⁷⁾。顧太清はまた自分の詩作や生活のモチーフを『紅樓夢影』の創作に溶け込ませている⁸⁾。先行研究では、ほかの続書に比べて顧太清の貴族夫人としての経歴及び写実的な作風は他に類を見ない特徴を有する⁹⁾と指摘されている。しかし、顧太清の『紅樓夢影』の構想の特色や彼女の経歴がそのような特色を形成する際に与えた影響についてはさらなる考察が必要だと考えられる。

本稿では、まず『紅樓夢影』において林黛玉が登場しない点と原著の悲劇的要素を取り除いた筋立てとの関係について考察する。次に賈政、賈赦の描写を通して、賈家の再興における男性の作中世界への関与を考察する。その上で、薛宝釵や王夫人、史湘雲の作中における描写を観察し、顧太清が十二釵の女性群体を再構築する中で意識的に薛宝釵の働きを弱めた点を検討したい。最後に顧太清が『紅樓夢影』を構築する中で呈示される「賈家の再興」と「紅樓の幻境」という二重の再構築が、続書成立上に有する意義について述べたい。

II. 『紅樓夢影』の描写の特徴——林黛玉の要素を取り除く

『紅樓夢影』の特徴は林黛玉が登場しないことであろう。『紅樓夢影』において林黛玉は生き返らず、ただ夢の中で賈宝玉と密会するだけである¹⁰⁾。『紅樓夢影』は、林黛玉を生き返らせたり転生させたりせず、彼女を真の人間としても登場させることもしないで、清代の『紅樓夢』の続書の中で唯一、賈宝玉と薛宝釵の結婚後の生活を描く続書である。林黛玉を登場させない理由について、沈湘佩は序文に次のように述べている。

「咸知絳珠有償淚之願，無終身之約，淚盡歸仙，再難留戀人間；神瑛無木石之緣，有金石之訂，理當涉世，以了應為之事。此紅樓夢始終之大旨也。海內讀此書者，因絳珠負絕世才貌，抱恨夭亡，起而接續前編，各抒己見。為絳珠吐生前之夙怨，翻薄命之舊案，將紅塵之富貴加碧落之仙姝。死者令其復生，清者揚之使濁，縱然極力鋪張，益覺擬不於論。此無他故，與前書本意相悖耳。／周知の如く、絳珠には涙で恩返しする願いはあるが、結婚の約束はない。涙を流し尽くして仙界に帰るため、人間界に残り難いのである。神瑛は木石の縁は無く金石の契があるので、当然、理は世を渡ることになり、それに従ってなすべきことをなしたのである。これは『紅樓夢』の始終を貫く大旨である。四海のうちにあってこの書を読むものは、絳珠が世に並

ぶもののない才色を持つのに恨みを抱えて若死にしたため、そこで前編を続けて続編を書き、おのおの自分の意見を述べているわけである。それで絳珠に生前の宿願を遂げさせ、薄命の旧案をひっくり返し、紅塵の富貴を碧落の仙女に加えた。また死ぬ者を蘇生させ、清者は伝わるほどに汚される。力を窮めて誇張して描いても、そうするほどに比べものにならなくなっていく。それは他でもない、ただ原作の本意に背くことになるだけである。」(『紅樓夢影序』¹²⁾)

引用した序文の前半部分は「『紅樓夢』の始終を貫く大きな主旨」というより、むしろ原著を理解したうえで、続書の作者が自らの構想や設計、取捨によって確立した続書の主旨を述べたものと言えよう。そして後半部分では清代の続書における最大の特徴と言えるほどの、林黛玉の悲劇をハッピーエンドに変えることに対する批判的な態度を表している。特に多くの続書において採用された、林黛玉を生き返らせたり転生させたりする描写について、沈湘佩は、誇張して描いたとしても、情理に叶わず、林黛玉を讃える効果はないとしている。沈湘佩の序文は、『紅樓夢影』全体に張り巡らされた顧太清の創作の意図をかなり正しく把握していると言えよう。特に林黛玉に幸福な結末を迎えさせる続書に比べて、林黛玉を登場させないことがそれらの続書と区別する顕著な特徴と考えられる。しかしまた一方において、『紅樓夢』原著に続くという続書の創作の立場から見れば、賈宝玉や薛宝釵が登場するとはいえ、林黛玉が登場せずとも続書が成立すると考えている、続書の作者たちの『紅樓夢』続書成立の条件とはいったい何であるのだろうか、疑問を持たざるを得ない。

そもそも、林黛玉に幸福な結末を与える続書でも、『紅樓夢影』のように林黛玉を登場させない続書でも、続書の作者がまず直面しなければならないのは原著の悲劇的要素を取り除く問題である。でも林黛玉の悲劇は避けられない問題である。原著において林黛玉の死は間違いなく賈宝玉の出家の要因である。林黛玉が天に戻り再び登場しなければ、賈宝玉の不意の出家の結末を誘発する要素は自然に取り除かれる。林黛玉の死は誘因となるだろうが、賈宝玉の出家は彼自身が賈家の後継者になることへの拒絶感および科挙や出世の軽視に起因する。沈湘佩の序文に言うように、賈宝玉が世に出てなすべきことをなせば、賈家の再興の根底にある問題はなくなるのである。

原著の悲劇的要素を取り除くために、顧太清は、原著

の林黛玉と王熙鳳、賈母の三人だけを夢の中に現わしたが、そのほかの亡くなった女性たちは誰一人として現実の人間として登場させず、常に触れたり追想したりするのみだった。また林黛玉や王熙鳳、賈母を夢の中に登場させたと言っても、人間としての影響力は、原著とは比べものならないほど弱まっている。

またもう一方、原作で亡くならなかった史湘雲や李紈などの寡婦については、その子供たちを非常に優秀に描写し、賈探春や薛宝琴については皆、夫が翰林に挙げられている。襲人、麝月、鶯兒は賈宝玉の妾に収まり、平兒は妾から正妻に取り立てられ、息子の賈荼を産んだ。香菱は娘の仙保を産んで平兒の息子の賈荼と結婚させた。金陵十二釵における最重要人物の一人である薛宝釵の姻縁に対しても、沈湘佩の序文に「金石の契がある」と示されるように、顧太清は「金玉姻縁」を通して薛宝釵のために悲劇的要素を取り除いた。

以上の通り林黛玉が登場しないことは、林黛玉の要素を取り除くためであり、根本的には原著の悲劇的要素を取り除く手法として顧太清が設定したものである。またそれも林黛玉の人生をハッピーエンドで終わらせることが続書の成立と必ずしも関連性がないことを表している。清代の林黛玉が救われる筋立てが主流となる続書創作の中で、林黛玉を登場させないのは確かに特別であると言ってよい。『紅樓夢影』において林黛玉が実際的な影響力をほぼ持たないにも関わらずよく注目される点については、もちろんそれは彼女の原著におけるヒロインとしての地位に関係するのである。しかし、『紅樓夢影』の創作の実際から見れば、実は顧太清は、林黛玉をほとんど登場させないと同時に、賈宝玉と薛宝釵についても同様に『紅樓夢影』で鮮明で大きな印象を残す役割を与えていない。特に薛宝釵の存在感を弱めて目立たせなくした設計には、顧太清の特別な構想が託されているのである。

Ⅲ. 賈家の再興——賈政の拝相と賈赦の隠居

清代の『紅樓夢』の続書において、賈家の再興はほとんどの続書で重点的に描かれている。しかし、誰がどのように再興するかで続書それぞれの性格が示される。例えば、最も早く書かれた『後紅樓夢』は、まず林黛玉を生き返らせて賈宝玉に嫁がせ、それから第19回目「林黛玉榮國府を再興す（林黛玉重興榮國府）」で示すように、林黛玉に賈家を再興せしめる。それによって林黛玉を目立たせている。『紅樓夢影』は林黛玉の転生や再生の描

写がなく、全24回中の第5回の「宗祠を祭りて賈氏再興す（祭宗祠賈氏重興）」で賈家はすでに再興の段階に入り、それ以降様々な角度から賈家の再興後の繁盛と栄達が描かれる。その賈家の再興においては、賈家の男性が重要な働きをしている。『紅樓夢影』の男性関係で特に注意すべきなのは、一つが賈政と賈宝玉の父子関係であり、もう一つは賈赦と賈政との兄弟関係である。多くの続書と同様、『紅樓夢影』においても賈宝玉は進士に合格して翰林に挙げられる。だが、一方で女性と親しみ、勉学が決して好きではないという特徴も依然留めている。『紅樓夢影』において、賈宝玉は役人との交流を拒絶していないが、積極的でも主動的でもなく、強いられた仕事をこなしているにすぎない。原著に比べて『紅樓夢影』の中の賈宝玉は、婚姻関係や家庭の倫理、社会的役目において男性化する傾向が強まる¹³⁾ 一方、家庭を視角とする叙事の構成の中でその地位や役割が薄弱になり、周辺化されている¹⁴⁾。実は賈宝玉の主人公としての存在感が弱まるのは清代の続書における普遍的な現象である。原著の賈宝玉は賈家の運命と金陵十二釵の結末に深く関わる人物である。しかし成立時期が最も早い『後紅樓夢』では林黛玉に賈家を再興せしめることから、作者が意識的に林黛玉を目立たせて賈宝玉の存在感を弱めていることがすでに窺える。さらに賈宝玉の次の世代である賈小钰や賈茂を主人公とする『綺樓重夢』や海圃主人の『続紅樓夢』において、賈宝玉はほとんど登場しない。これは作者の関心が賈家の再興そのものに置かれ、賈宝玉によって賈家が再興するか否かは興味の核心ではないことを表す。一方で『紅樓夢影』には賢徳妃となった賈元春が登場せず、賈政に榮国公の爵位を世襲させ、礼部尚書、宰相を拝命させることで賈家の再興の成果を固めている。

賈政の美化は、原著の後40回にすでに見られ、多くの続書はこの描写を受け継いでいる。しかし、『紅樓夢影』が異なるのは、賈政を美化するだけでなく、同時に賈赦も浄化している点である。『紅樓夢影』で賈赦が隠逸的で上品な雰囲気溢れた温厚な有徳者として描かれる点について、先行研究は賈家の再興や家族の栄達を造営するための必然的な要求である¹⁵⁾と指摘する。しかし、賈政に体现される積極的な出世を求める儒教思想に比べて、顧太清が賈赦に与えた隠逸的で淡白な道家思想の特徴には注目すべきである。『紅樓夢影』では、例えば賈珍、賈連、薛蟠などを悪習に染まらぬように改変することで、原著のような彼らの無法な行いで、賈家が壊滅的

な悪運を招いてしまうことを防いでいる。しかし、賈赦の人間描写の変化はすでにこうした目的や範疇を超えている。

第11回「辺疆を靖んじて榮公相を拝し 別墅を置きて 赦老隱居す（靖邊將榮公拜相 置別墅赦老隱居）」では、賈政と賈赦をともに取り上げた場面がある。賈政は、吏部尚書から東閣大学士に昇って宰相に至り、しかも入閣した後も仕事に励み、官途の頂点を窮める。一方、賈赦は別荘を購入して隱居し、その別荘を「隱園」と名づけ、自らも「隱園主人」と号している。続く第12回において、賈家の衆人が隱園を遊覧する際、「紫氣東來」「愛蓮精舍」「覽勝軒」「五柳遺風」「雲根」「海屋添籌」「葫蘆屋子」「自在」の扁額や對聯、刻字などいたるところで隱逸や高士の氣風に触れる。しかも、この氣風は賈赦を通して作品中を貫くものとなっている。儒教と道教といった息吹の中で、賈赦は道家に偏るが、それに対して賈政は儒家に偏る、と言えるだろう。皆が隱園を遊覧するとき、最初に見た扁額は「紫氣東來」であり、それは老子が隱居する際に現れた風景である。また第23回「慈幃に謁して榮公相を罷む（謁慈幃榮公罷相）」において、賈母が賈政の夢の中に現れて、彼の官位が極上品に達し、福寿祿の三字すべてが既に具わったことを告げ、老子の『道德經』を引いて「功為り、名遂げて身退くは天の道なり」と説いた。その後、賈政は夢のことを王夫人に伝えて、王夫人の口を借りて『邯鄲夢』について言及した。先行研究は、賈母が賈政の夢の中に現れてことづけをするのは、顧太清の夫の奕絵が官職を辞したことが影響したため¹⁶⁾と指摘する。しかし、賈政や賈母、王夫人の描写と奕絵の辭職との関係についてはさらに区別して考える必要があると思われる。『紅樓夢影』では賈政で儒家の好む積極的な出世が體現される一方、賈政の夢に現れて『道德經』を引用したのは賈母であり、『邯鄲夢』を言い出したのは王夫人である。ここには顧太清自身の道教の信仰が影響していると考えられる。顧太清はまた賈赦を「隱園主人」に改造し、隱逸を好む、富貴に淡白な道家の特徴を与えている。『紅樓夢影』で賈赦の姿を借りて作中に鮮明な道教の思想を注ぎこむ描写からは、顧太清・奕絵夫婦が深く道教に傾倒していたことが見て取れる。奕絵は別号を太素といい、早くから道教を信仰し、「太清の別号も太素に合わせて作られ、またその詞集も『東海漁歌』として奕絵の詞集の『南谷樵唱』に合わせて名づけている」¹⁷⁾のである。『天遊閣集』における「天遊閣」は奕絵府での顧太清の居室¹⁸⁾

であるが、「天遊」という言葉は『莊子・外物』より出る。太清や漁家、天遊は道家の思想の影響が色濃いことを示している。

清代の『紅樓夢』続書において賈政を美化する現象はよく見られるが、このように賈赦という登場人物を積極的に活かすのは『紅樓夢影』だけである。顧太清が自分の道教信仰に基づいて賈赦の人間像を改造するのは、顧太清が賈家の再興を強く意識していることを示している。顧太清が構築する賈家の再興において、賈政にせよ賈赦にせよ、賈家の再興を支える男性の登場人物は絶対に欠かせないが、賈宝玉が中心的な働きをして賈家を再興させることは必ずしも絶対的な要件ではない。また、顧太清が賈家の再興の中で薛宝釵に実質的な働きをさせなかった点にも注目したい。全書を帰結する第23回「慈幃に謁して榮公相を罷む（謁慈幃榮公罷相）」と第24回「幻境を遊びて宝玉夢に驚かす（遊幻境寶玉驚夢）」から、顧太清が『紅樓夢影』を構想する中で「賈家の再興」と「紅樓の幻境」との二重の構造がはっきりと示されている。この二重の再構築の下で、顧太清は独自の設計によって登場人物を配置し、プロットを構築している。

IV. 十二釵の再構築——薛宝釵と王夫人、史湘雲

賈家の再興と同様、十二釵の女性の描写はほぼ清代の『紅樓夢』続書に共通する特徴と言える。また、どのように十二釵の女性群を再構築するかは、続書の作者たちの好悪や傾向を表すものであり、続書の特色を決定する要因にもなる。『紅樓夢影』では賈宝玉によって全書を帰結せしめ、その描写の中で「紅樓」も3回現われている。「紅樓」の本意は富裕家の女性が住む華麗な建物であるが、『紅樓夢』原著や続書では「紅樓」が金陵十二釵と太虚幻境とを緊密につなげている。

「正北上一座紅樓，幾段朱欄，只見釵、黛、雲、琴、麝、欄談笑。寶玉笑道：原來都在這裡。你們到這神仙境界來逛，也不叫我一聲。／ちょうど北面の上に建つ紅樓に幾つかの欄干があり、薛宝釵や林黛玉、史湘雲、薛宝琴が欄干に寄って談笑するのが見えます。賈宝玉が笑って言いました。なんだ皆はここにいたんですか。このような仙境に遊びに来るのに、私を呼ばないなんて。」（第24回）

「出了房門，又把這座紅樓週迴繞了幾遍，又不見樓梯。心中想道那日聽曲兒唱的是無梯樓兒難上下。難道真有無梯樓。／部屋から出て、またこの紅樓の周囲を何回も回りましたが、階段すら見つかりません。心に思い

浮かぶあの日聴いた曲には、梯子のない楼には上り下りが難しい、というのがありました、まさか本当に階段のない楼があるではありませんか。」(同前)

「俟風過了，睜眼一看，那裡有紅樓碧戶！卻是慘淒淒的一片荒郊，有許多白骨髑髏在那裡跳舞。寶玉吃了一大驚，却也不知是真是假。／強い風が過ぎて目が覚めると、紅樓や碧殿などどこにもありません。惨たらしい荒野が目の前に広がるばかりでありました。沢山の白骨の髑髏がそこで踊っています。賈宝玉は驚いて本当のことかどうか分かりません。」(同前)

第24回で「紅樓」が初めて現われるのは、賈宝玉が太虚幻境に「紅樓」を見たときであり、薛宝釵や林黛玉、史湘雲、薛宝琴も見えている。二回目は「無梯楼」を「紅樓」に喩えるときである。最後の「紅樓や碧殿などどこにもない」とは、顧太清の「湘佩三妹を哭す」詩の「紅樓の幻境もと據る無く」と同様に、「紅樓」の虚無を表している。顧太清がここで「紅樓」をはっきりと指摘するのは、やはり十二釵の描写と関連させることにあり、賈政によって賈家を再興させ、賈宝玉によって「紅樓」の虚無に目覚めることで全書に結末をつけることを表している。

『紅樓夢影』の第10回と第11回では、賈探春が「群芳社」を発足させようとするが、ここに『紅樓夢影』における新しい十二釵が示されている。それは湘雲、宝琴、李綺、邢岫煙、探春、惜春、李紈、宝釵、蔡如玉、尤氏、平兒(作中の順による)の十二人である。この中で賈環の妻の蔡如玉以外、すべて『紅樓夢』原著の登場人物である。そしてこの十二釵の描写の特徴は以下の三つに分けられる。

まず、薛宝釵は『紅樓夢影』で賈家の嫁として息子の賈芝を産み、王熙鳳が死んだ後、賈璉は平兒を正妻に取り立てている。賈家の采配や仕事は薛宝釵と李紈、平兒が王夫人に協力して処理し、重要事項の決定権は王夫人が握っている。次に、賈探春が発足した群芳社には、ほかに薛宝釵、史湘雲、薛宝琴、香菱、賈宝玉などがいる。最後に、薛宝釵にとって最も大切なことは賈宝玉と夫婦関係にあることにある。『紅樓夢影』では金玉姻縁の枠組みの下に、また襲人と麝月、鶯兒を妾に収め、一妻三妾の局面を描いている。

『紅樓夢影』全書の描写から見て、顧太清が意識的に薛宝釵をヒロインとして描写していることは疑いないが、それも原著に忠実であろうとする序文に合致している。しかし、ほかの清代の続書が力を尽くして林黛玉あ

るいは薛宝釵を際立たせて十二釵の群体を描くのに比べ、顧太清が意識的に薛宝釵を中心として『紅樓夢影』の十二釵の群体を構築したとは言い難い。『紅樓夢影』における王夫人や史湘雲の存在が、薛宝釵の女性主人公としての核心的な地位や役割を大いに弱めているからである。

賈家内部の大事の決定権が王夫人にある状況の中で、薛宝釵が自ら裁量できるのは、賈宝玉との夫婦関係に限られる。そして薛宝釵と賈宝玉との関係の中で、最も顧太清が力を入れたのは、林黛玉に対する態度の描写である。顧太清は実際の登場人物として林黛玉を登場させていないが、賈宝玉が林黛玉を思念することは回避していない。こうした「林黛玉を忘れない」ことは、『紅樓夢影』において賈宝玉の感情生活の中で重要な一つの側面として描かれているのである。例えば、第6回で賈宝玉は目にした彫刻の中の楊貴妃から林黛玉を想起して忘我の境地に至り、思わず「能く精誠を以って魂魄に至る(能以精誠致魂魄)」と言葉に出てしまうが、顧太清は、薛宝釵をもその場に置いている。薛宝釵はそれを聞き賈蘭に「叔父さんもまた月宮に遊びに行ってしまう」と言い、賈宝玉を遮った。また第8回で林黛玉の20歳の誕生日の際、賈宝玉が花神を祭る名目で林黛玉を祀ろうとしたが、そのとき薛宝釵は彼が瀟湘館へ行くと推量しただけでなく、彼を止めようとする襲人に対して「止めなくてもいい。止めようにも止められない」とも言った。第9回で賈宝玉が帰ってきた時、薛宝釵はまた冗談を言うように、「花神はいかがでしたか」と彼に聞いた。林黛玉に関わる場面に、顧太清が意識的に薛宝釵を置くのは、「金玉姻縁」がその場にいることを表しているであろう。『紅樓夢影』において林黛玉がすでに賈宝玉の思念や夢の中にしか存在できず、彼と薛宝釵の「金玉姻縁」こそ現実の夫婦関係であることを示しているのである。

賈宝玉との婚姻を勝ち得て賈家の夫人になるのは、薛宝釵が全書のヒロインとなるのに必要な条件である。しかし、そのほかの清代の続書の描写からみて、全書のメインヒロインになるには、更に二つの条件が必要である。第一に、賈家の財務管理などの決定権を握ることで、その最も良い方法は賈家の再興に決定的な役割を果たすことである。次に十二釵を象徴する詩社の作詩の中でトップを獲ることである。前者は有能な夫人である側面を、後者は佳人としての優秀さや聡明さを際立たせる。しかし『紅樓夢影』においては賈家内部の裁量権は王夫人が

握っており、詩社の首位は史湘雲であった。

『紅樓夢影』では、顧太清が薛宝釵を買家の夫人に置く一方で、彼女の働きを弱めようとしているが、その意図は題目の設定からも見て取れる。『紅樓夢影』全24回の題目の中には、例えば賈宝玉や賈政、王夫人、史湘雲、賈探春、更に花襲人、惜春、邢岫煙なども現れるが、薛宝釵は一度も題目に名が記されていない。全書のメインヒロインと見なされるべき彼女が、題目中に登場しないのは、どう考えても不可解である。顧太清が薛宝釵を抑えようとする意図が最も顕著に見られるのは第4回の題目「王夫人飴を含んで孫を弄り 史湘雲孤を遣して女を誕む（王夫人含飴弄孫 史湘雲遣孤誕女）」である。この回では薛宝釵が男の子の賈芝を産み、史湘雲が女の子の掌珠を産む。また、第6回では賈宝玉が自分の通靈宝玉を息子の賈芝に与え、薛宝釵は自分の金鎖を掌珠に与え、「金玉姻縁」が次の世代に継承される。作品のプロットにおいても、章回体の小説の題目の設計の対称性においても、また薛宝釵の全書における地位や役割においても、この回で薛宝釵が息子を産むことが、史湘雲が娘を産むことと対になる以上、題目においても対にならぬ理由はない。しかし、「王夫人飴を含んで孫を弄る」とする題目から言えば、顧太清が、薛宝釵と賈芝との親子の関係より、王夫人と賈芝との祖母と孫の関係を強調しているという創作の意図が窺える。つまり、薛宝釵の上に王夫人がいることを意識したうえでの題目の設定になるわけである。『紅樓夢影』における王夫人の地位は原著における賈母のそれに当たる。しかも王夫人が常に薛姨媽、李嬌娘（李紈の叔母）と一緒に「老太太」と称され、王夫人が頂点となって十二釵が目下の者として王夫人を取り囲んで存在する描写を行っている。

薛宝釵を描写する上で表立っているのは買家の嫁としての賈宝玉との夫妻関係や、原著の王熙鳳のように李紈と平兒と一緒に担当する買家の執事の職責の場面であるが、もう一つの重要な場面は、賈探春や史湘雲などを行う十二釵の詩社「群芳社」の活動である。「群芳社」は『紅樓夢影』で十二釵に関する最も重要な描写の一つである。その中には薛宝釵のほかに、史湘雲や賈探春、薛宝琴などもある。例えば、第13回で薛宝釵が巧姐を教育して鄭成康と柳子厚の典故を教える時、薛宝釵の博学を存分に表しているが、十二釵の描写から見て『紅樓夢影』において詩才が最も鮮明に突出するのは史湘雲である。

「邢岫煙笑道：我們如何作的過翰林先生們。湘雲冷笑

道：那位蘭太史的大作，沒多見過，若論寶老先生，是領過大教的。在這群芳社裡只怕又是倒數打頭呢。／邢岫煙が笑って言いました。私たちがどうして翰林さまたちに勝りましょうか。史湘雲が冷笑して言いました。その蘭太史の大作はそう沢山は見てはおりませんが、宝玉先生と言えばよく存じ上げております。この群芳社でも恐らくまた後から一番になるでしょう。」（第11回）

第10回で賈宝玉と賈蘭が進士に合格して翰林に挙げられたばかりで、邢岫煙が翰林たちに勝てないと心配していた時、史湘雲が冷笑して賈宝玉と賈蘭に軽蔑の態度を示した。詩才が朝臣ないし進士などの男性を超越していることを強調して佳人の才能を目立たせる描写は、『玉嬌梨』や『平山冷燕』などの才子佳人小説にはすでに見られ、『紅樓夢』原著や大多数の続書にはこの手法が継承されている。『紅樓夢影』第10回の題目は「宝玉の叔侄翰林に入り 探春の姉妹詩社に邀える（宝玉叔侄入翰林 探春姉妹邀詩社）」であり、「翰林に入る」と「詩社に邀える」を対照的に描いている。賈宝玉と同じ世代の賈珍、賈璉、薛蟠などの男たちは皆作詩ができず、賈宝玉は作詩をこなすが史湘雲の台詞にあるとおり、「詩社」が「翰林」を圧倒する状況にある。『紅樓夢影』において最もよく十二釵の詩才を表すのは第19回の「消寒詩」九首である。賈政が出題し、また優劣も評価する。その中で賈政が最も評価した4首のうち「寒窓」「寒月」「寒鴉」の3首は史湘雲が作り、もう1首は薛寶琴の作である。

「老爺說這是上賞的，問寒牕、寒月、寒雲、寒鴉這四首是那位作的？就送那位。／旦那様は、これが最上の下賜とおっしゃり、「寒窓」「寒月」「寒雲」「寒鴉」この四首は誰が作ったのかとお尋ねになり、そちらに与えなさい。」（第19回）

「湘雲說：別管那些，橫豎我作了相國的第一門生了。／史湘雲は、何はともあれ、どっちみち私が相国の第一門下になったのですと言いました。」（同前）

賈政が出題して優劣を評定する構成に対して、先行研究は、それは顧太清の詩才が阮元に褒められたことと関わりがある可能性があり、また顧太清本人の文学経歴の反映であると指摘している¹⁹⁾。「消寒詩」9首を通して顧太清自身の詩作の創作や女友達との交流の様子が窺える。そのほか、「消寒詩」9首は原著の「菊花詩」12首を真似て作られている点にも注意したい。原著の「菊花詩」12首は第5回「金陵十二釵正冊（副冊、又副冊）」

及び「紅樓夢十二支」套曲以外、「十二」の数字を際立たせる作品群であり、金陵十二釵を表す意図は極めて明らかである。その中で林黛玉が3首を以て菊花詩の首位を占めた。『紅樓夢影』の「消寒詩」は9首しかないが、すべて顧太清の『天遊閣集』詩6の「消寒九首を少如、湘佩と同じく作る（消寒九首与少如、湘佩同作）」²⁰⁾より出ており、しかも顧太清がその中の6首を团扇に書き、これらを非常に珍重していることが見て取れる。賈政が最も評価した4首の詩の中で3首が史湘雲の作であり、顧太清は薛宝釵ではなく史湘雲に「消寒詩」の首位を与え、そこで史湘雲は「やはり私が相国の第一門下になる」と言っている。史湘雲は若き進士の賈宝玉と賈蘭に軽蔑の態度を示したが、尊敬する賈政相国に対しては「第一門下」を自称する。顧太清はこのようにして史湘雲の存在を際立たせている。

「消寒詩」9首の最も大きな意義はそれらが直接『天遊閣集』から出ていることにあり、顧太清が自分の実生活のモチーフを『紅樓夢影』の創作に溶け込ませたことの最も直接的で最も有力な証拠である。十二釵の詩才を際立たせて描写するのは清代の続書において極めて突出した特徴である。それは続書の作者たちによる明清の才子佳人の小説や『紅樓夢』原著の描写方法の継承であると同時に、佳人たちの才能を既婚の婦人十二釵に引き継ぎ、新しい創作の局面を開拓したものと言える。しかし、原著に対する継承という角度から見て、一般的に最も詩才が優れる描写は主役にこそなされるべきであろう。例えば、林黛玉が突出することで有名な『後紅樓夢』は、第28回で原著の「菊花詩」12首を真似て「蘭花詩」12首を作り、その中で林黛玉の「閨蘭」に首位を与えた。薛宝釵を突出させることで有名な『紅樓復夢』は、第73回の「如是園賞花詩社」で、薛宝釵は詩会に寸楮を書いただけでなく、作詩した12人の中で薛宝釵の詩作が元稹と白居易の「元白」を圧倒すると皆が評した。そして『紅樓夢影』では、十二釵の詩才を突出させる描写をする際、詩魁を薛宝釵ではなく、史湘雲に与えるのは、作者が史湘雲を気に入っているのと同時に、薛宝釵のヒロインとしての働きを弱めるために行ったに違いない。顧太清が史湘雲を気に入っているのは、「消寒詩」の描写だけでなく、彼女の娘の掌珠の描写にも現れている。

V. 「金玉姻縁」から史湘雲の母娘の「金麒麟」「玉麒麟」

賈宝玉の次世代の描写で突出して描かれるのは、一人が賈宝玉の息子の賈芝でもう一人が史湘雲の娘の掌珠で

ある。これは第4回の題目「王夫人飴を含んで孫を弄り 史湘雲孤を遣して女を誕む」に表われている。賈芝の描写においては薛宝釵との母子関係の上に更に強調されるのが王夫人や賈政との祖父母と孫との関係である。これに対して史湘雲の娘の掌珠については母である史湘雲の存在が際立っている。『紅樓夢影』で「金玉姻縁」の玉と金鎖のように吉祥や姻縁の象徴を予示する宝物の描写として、まず言及しなければならないのは史湘雲の金麒麟である。

「探春説：也怪，怎麼這些事都湊在偌們家？二哥哥的玉，寶姐姐的金鎖，史妹妹的麒麟，那幾年鬧的還了得！／賈探春は言いました。それもおかしいですね。どうしてこうしたものが皆私たちの家にそろっているのですか。宝玉兄さんの玉、宝釵姉さんの金鎖、史湘雲ちゃんの麒麟、あの何年か大騒ぎだったのでしょね。」(第6回)

ここで賈探春が賈宝玉の玉と薛宝釵の金鎖に触れる時、史湘雲の金麒麟にも言及している点が注目される。『紅樓夢影』では、他の清代の続書の一部のように大げさに「金玉姻縁」を表現していないが、玉と金鎖との行き先について明確に述べている。第6回では、賈宝玉が自分の玉を息子の賈芝に与え、王夫人が自らそれを賈芝に掛けてやり、また薛宝釵は満月のプレゼントとして自分の金鎖を史湘雲の娘に与えた。これによって「金玉姻縁」がすでに次の世代に引き継がれたことが示され、作者が金玉姻縁の観念を認めることも示されている²¹⁾。しかし、『紅樓夢影』では「金玉」の描写は「金玉姻縁」を認めるに留まるだけでなく、それよりさらに重要な点が史湘雲に関連する描写にある。第6回以降、玉と金鎖の描写は現れない一方、史湘雲と麒麟に関わる描写が多く見られるようになる。

「你知道麼？他的麒麟丢了！／知っていますか。彼女の麒麟がなくなってしまったのですよ。」(第6回)

「我有一件東西要送他姐兒帶，那纔才是寶貝呢！／私は彼女の娘にあげたいものがあります。それこそが本当の宝物です。」(同前)

「那龍女就倚欄觀海，從他身上不知掉下個甚麼物件來，一道金光落在海裡。／その龍女は欄干に寄りかかって海を眺め、彼女の体から何か落ち、ひとすじの金色の光が海に落ちました。」(同前)

「據我看彷彿點麒麟，所以要送雲妹妹。／私から見ると、それは麒麟のようです。だから雲ちゃんにあげたいのです。」(同前)

賈探春が史湘雲の麒麟がなくなったと言い、そこで馮得宝という漁師が海からすくった龍女の宝物が麒麟のようなので史湘雲に与えて彼女の娘にかけてやる。これら史湘雲が麒麟をなくす件は、顧太清が原著から史湘雲と金麒麟との関係だけを借り、そこに自ら創作した麒麟の新しいエピソードを加えた、とする改編の妙である。

「(寶玉) 又問：三妹妹送的麒麟帶着沒有？湘雲道：實在是件寶貝，等明日午正放在水裡看，他那光彩真令人神搖目炫。／(賈宝玉は) また聞きました。探春ちゃんが送った麒麟は掛けましたか。史湘雲は言いました。本当に宝物です。明日の昼に水の中に置いてやれば、その光彩は本当に華やかで目も眩んでしまうでしょう。」(第10回)

「正走着，那日光正射在掌珠身上，如同打了個大閃，眾人都吃了一驚。原來是他那寶貝映日放光，眾人都說：真是寶貝。／歩いてみると、日光がちょうど掌珠に射して、まるで大きな稲妻が光るようです。皆はあっと驚きました。なんとそこには彼女の宝物が太陽に映って煌いていたのです。皆は本当に宝物だと言いました。」(第13回)

第10回で史湘雲の娘の名づけを問う時も、また賈探春が送った麒麟に言及している。史湘雲が本当に宝物だと言うだけでなく、宝物が目を奪われるほど輝かしいとも述べている。また第13回で掌珠が宝物を帯びる描写があり、それを見た衆人は驚嘆する。続いて第14回でも王夫人や賈政、賈宝玉などが皆この宝物を觀賞する描写があるが、これ以降、麒麟の宝物はもう登場しない。この後の第22回で顧太清はまた掌珠のために「玉麒麟」を設計しており、この玉麒麟は掌珠の姻縁に関連するのみならず、王夫人にも関わっている。

「我把那玉麒麟給了他，那是太太嫁粧陪的。要聘給芝兒作媳婦，太太想怎麼樣？／私はあの玉麒麟を彼女にあげました。あれは奥さまが嫁入り道具としてもらったのです。そして芝ちゃんの嫁にしたいと思いますが、奥さまはどう思われますか。」(第22回)

「湘雲就把昨日給麒麟的話告訴王夫人，王夫人笑道：那還是我出嫁的時候陪老爺的，帶了五十年了。／史湘雲は昨日麒麟をもらったことを王夫人に言いました。王夫人は笑って言いました。あれは私が嫁に来た時に旦那様にお持ちしたものです。五十年掛けていました。」(同前)

「寶玉道：怪不得前日在園子裡，老爺瞧見姐兒很誇，就把自己長帶的那塊麒麟佩摘下來給他帶上。眞也巧，

他母親有金麒麟，他就有玉麒麟。／賈宝玉は言いました。先日庭園にいる時、旦那様は掌珠を見て非常に褒め、自分が常に掛けている麒麟の玉佩を外して彼女に掛けてやりました。うまい塩梅に、彼女の母に金麒麟があるように、彼女には玉麒麟があります。」(第23回)

賈政は掌珠を賈芝の嫁にしようとし、玉麒麟を与えた。この玉麒麟は王夫人が嫁にきた時に持参したものである。賈宝玉は特に強調して掌珠の母親に金麒麟があれば、彼女に玉麒麟があると言い、金と玉の二つの麒麟を併称している。第22回の題目の後半は「麒麟を帯びて四美聯姻する(佩麒麟四美聯姻)」であり、聯姻する四美は、賈政や王夫人によって婚姻関係が結ばれる賈芝と掌珠、賈荅と仙保のことを指している。この四人の子供の中で麒麟を帯びたのは掌珠のみである。麒麟の宝物と玉麒麟は、第6回「敏探春細かに怪物を談じる(敏探春細談怪物²²⁾)」と第22回「麒麟を帯びて四美聯姻する(佩麒麟四美聯姻)」の中に見られるだけでなく、顧太清が自ら独自に設計して創作した、原著の金玉姻縁や金麒麟に最も近い吉祥や姻縁を象徴する宝物の描写である。この二つの宝物はどちらも掌珠に集中している。一方で掌珠はしよせん喋れるようになったばかりの子供にすぎず、彼女に関する麒麟の描写はいつまでも彼女の母親の史湘雲と金麒麟を想起させることになる。掌珠を突出させる描写は、客観的に見て史湘雲の存在を突出させる部分に実際の効果が表れていることが多い。麒麟の描写は「消寒詩」の描写と似ており、最も大きな問題は薛宝釵の見せ場が奪われ、史湘雲母娘を薛宝釵の母子より目立たせることにある。『紅樓夢影』は原著を継承する立場で薛宝釵をメインヒロインに位置づけたが、薛宝釵を際立たせるほかの続書、例えば『紅樓復夢』や『補紅樓夢』などに比べると、女性群体の構成の中で史湘雲を用いて薛宝釵の核心としての存在を弱めようとする顧太清の意図が明らかである。

また掌珠の描写において王夫人に触れているが、ここでの王夫人の描写は、母子の関係より祖孫の関係が強調される『紅樓夢影』において軽視できない意義を持っている。第6回で掌珠が薛宝釵の金鎖をもらった時、すでに賈芝と掌珠との姻縁を示す意図が窺えるが、第22回には王夫人が嫁いだ時に持参した玉麒麟が再び現れる時、賈芝と掌珠との姻縁がようやく直接的に示される。薛宝釵の金鎖と王夫人の玉麒麟のうち、やはり玉麒麟が掌珠の姻縁を決める宝物であろう。そこから顧太清が薛宝釵の上に王夫人を置き強調する意図が窺える。『紅樓夢影』

においてこのように祖孫の関係を強調して描く部分には、顧太清自身の実生活の影が見え隠れする。晩年の顧太清にとって、子供たちが結婚して孫を抱くのは人生の最も楽しいときであっただろう²³⁾。顧太清はしばしば『天遊閣集』に子供や孫を描いたが、詩6「春日偶成」にも以下の如く描いた。

「有子誰能讀父書／子有るも誰が能く父の書を読み
家聲漸失舊規模／家声漸く旧規模を失う
最愁廢學慚龍種 [自注：鈞、釗、初三兒皆不好讀書。]
／最も愁うは学を廃し龍種に慚じるを [自注には、
載鈞、載釗、載初の息子三人は皆読書を好まないと
ある。]

且喜承歡抱鳳雛 [自注：謂孫女溥榕、孫男溥楣。]／
且つ喜べるは承歡して鳳雛を抱ふこと [自注：孫
娘の溥榕、孫の溥楣を謂う。]

不惑年華思退歩／不惑の年華に退歩を思い
無多歲月敢前趨／多きこと無き歳月に敢えて前趨す
含飴亦是人生樂／飴を含むも亦た是れ人生の樂ならん
閑坐南窗弄掌珠／閑に南窓に坐り掌珠を弄る」

(『天遊閣集』詩6²⁴⁾)

この自作詩には「飴を含むも亦た是れ人生の樂ならん
閑に南窓に坐り掌珠を弄る」とあり、『紅樓夢影』第4
回の題目の「王夫人飴を含んで孫を弄る」が詩を踏襲し
ていることが看取できるし、詩中の「掌珠」はまさに史
湘雲の娘掌珠そのものである。しかも晩年の顧太清の家
族の中での地位は原著の賈母や『紅樓夢影』の王夫人に
似ている。『天遊閣集』と『紅樓夢影』とを対照して見
れば、間接的あるいは直接的に顧太清が自分の実生活の
モチーフを『紅樓夢影』に溶け込ませる傾向が最も明ら
かなのは、まさしく王夫人と史湘雲に関する描写である
と言えよう。

顧太清が自分の人生の経歴を『紅樓夢影』に溶け込
ませる最も大きな意義は、女性群体の描写に対する影響で
ある。林黛玉あるいは薛宝釵を際立たせる多くの清代の
続書に比べ、『紅樓夢影』は林黛玉を実際の登場人物と
して登場させないと同時に、メインヒロインとしての薛
宝釵の働きも抑えられている。ここでは王夫人を頂点
に、薛宝釵や史湘雲をその周囲に配する、という女性描
写の構図が形成された。この構図は清代の続書の中でも
特に独創的である。原著における賈母と金陵十二釵のよ
うな関係を参照したこの女性の構図が形成される中で、
顧太清が自分の実生活のモチーフを、王夫人や史湘雲で
過度に体现するのは、作品の性格を決定する非常に重要

な点となったに違いない。顧太清の貴族の太夫人と女流
詞人という二つの身分の融合が、『紅樓夢影』独自の女
性群体の特色の形成を促したのである。王夫人と薛宝釵
との関係の描写には、顧太清の晩年の家族の中での立場
や地位、または貴族の家庭における姑と嫁との実際の関
係が自然に示されているものかもしれない。また顧太清
が意識的に王夫人や史湘雲を活かして薛宝釵の働きを抑
えるのは、薛宝釵を過度に宣揚するほかの続書と『紅樓
夢影』とを区別する効果もある。さらにこうした点から
も、顧太清による女性描写の主眼は十二釵の再構築に置
かれ、林黛玉や薛宝釵が中心人物になるか否かは、十二
釵の成立に絶対不可欠な条件ではないことが分かるので
ある。

VI. 終りに

『紅樓夢影』の女性描写において、林黛玉が登場しな
いことが『紅樓夢影』の特徴となるのは、薛宝釵がヒロ
インとして十分に目立たない点にあり、その根本は顧太
清による十二釵の女性群体に対する設定と構想が支えて
いる。こうした女性の群体の設計や構想は、林黛玉が薛
宝釵を際立たせる清代の続書と『紅樓夢影』とを区別す
る特徴を生み出すだけでなく、文学の創作に対する顧太
清の認識を反映している点に更なる重要な意義がある。
一般的に清代の『紅樓夢』続書の着眼点は二つあり、一
つは賈宝玉や林黛玉、薛宝釵の婚姻、もう一つは賈家の
再興である²⁵⁾。確かに続書は一般的に序文や冒頭部分に
原著、特に賈宝玉や林黛玉、薛宝釵の三者に対する見解
や態度を述べる。しかし具体的な描写では、三者が必ず
しも作品の中心的な登場人物になるとは限らない。『紅
樓夢影』において、林黛玉が登場せず、また薛宝釵の役
割を弱められていることは、賈宝玉や林黛玉、薛宝釵の
三者の関係や描写が、顧太清にとっては賈家の再興や
「紅樓」の再構築を設計するためのコマにすぎないこと
を表している。つまり、顧太清が最も力を傾注していた
のはその二重構造の再構築にあり、三者の関係ではない
のである。

『紅樓夢影』では、賈宝玉が進士に及第し、史湘雲が
詩才で男性の翰林を圧倒するような才子佳人の小説の痕
跡が残されている。才子佳人小説の二大要素はすなわち
「科挙」と「結婚」である。才子は通常、進士に及第し
た後、佳人を妻に迎えて円満な姻縁を獲得する。しかし
『紅樓夢影』では、最初から賈宝玉と薛宝釵が結婚して
おり、賈宝玉が進士に合格するのも結婚の後である。こ

れは顧太清に才子佳人を描く意図がないことを表している。また賈政や賈赦の描写において体现される儒教や道教の思想は、奕絵の官界での生活の観察を通して得た、顧太清の出世への思考を表している。顧太清はまた、自分の生活のモチーフを作中に溶け込ませ、作中で王夫人を頂点とする女性の構成の局面を形成した。これらのことから、顧太清は若い男女の姻縁だけでなく、貴族家庭の経営に注目したことがわかる。女性への注目も若い女性の聡明さと優秀さに限らず、貴族家庭における女性の生活の実態にある。それは、顧太清の才子佳人小説の型を超越する能動性を表す一方、賈家の再興や十二釵への再構築のうちに貴族家庭の小説への転換を完成させていたことをも表しているのである。

引用文献

- 1) 『紅樓夢影』は顧太清に著された『紅樓夢』原著の第120回に続く作品で、全24回からなり、その筋立ては次のようなものである。賈政は毗陵駅で、僧と道士に誘拐されて出家した賈宝玉に逢い、彼を救って賈家に連れて帰り、家族と団欒の時間を過ごした。薛宝釵は息子の賈芝を産み、賈政は榮国公の爵位を世襲し、賈家は再興した。賈宝玉は進士に及第し、翰林院庶吉士に挙げられ、賈政は東閣大学士を授かり宰相の位を拜する。賈宝玉が幻境を訪れ、「紅樓」を見かけたが、階段が見つからない。強い風が過ぎて目が覚めてみると、「紅樓」が見つからなくなり、目の前に荒野と白骨の髑髏しか見えない。賈宝玉は驚き、本当のことかどうかもわからない。
- 2) 顧太清は本名西林春、姓は西林覺羅。鄂昌の後裔であるため、顧の姓を改めた。字は梅仙、号は太清、満州の鑲藍旗の人である。金啟琮「満州女詩人顧太清和東海漁歌」(『顧太清集箋注』付録三、中華書局2012年11月、794頁。原文は『満州文学研究』1982年第1期に載せる)を参照。
- 3) 『紅樓夢』は清朝中期乾隆帝の時代(18世紀中頃)に書かれた中国長篇白話小説である。全120回から成り、前80回が曹雪芹の作、後40回は高鶚の続作といわれ、その筋立ては次のようなものである。賈宝玉は、名門の賈氏一族の貴公子であり、勉学が嫌いで豪邸に同居する美少女たちと風流生活を送る。従妹の林黛玉と相思相愛の関係となるが、林黛玉は病弱で悲しみを抱いて死亡し、賈宝玉は「金玉の縁」で結ばれた温かな良妻賢母型の薛宝釵と結婚する。賈家は罪で家産を没収され没落し、人々も離散し、賈宝玉は出家した。
- 4) 顧太清の祖父である甘肅省巡撫の鄂昌は、鄂爾泰の門下生の「胡中藻案」の文字獄に巻き込まれた。鄂昌は乾隆帝に、首吊りによる自死を賜り、その後、その一族は没落した。
- 5) 太清西林春原著、金啟琮・烏拉熙春編校：『天遊閣集』、遼寧民族出版社、2001年10月、235頁。
- 6) 趙伯陶：『『紅樓夢影』的作者及其他』、『紅樓夢學刊』、1989年第3輯。
- 7) 詹頌：「女性詮釈与重構：太清『紅樓夢影』論」、『紅樓夢學刊』2006年第1輯、273頁。
- 8) 張菊玲『眩代才女顧太清』(北京出版社、2002年1月、95頁)では、『紅樓夢影』第19回の「消寒詩」9首は『天遊閣集』によると指摘され、また前掲注7(282頁)では、『紅樓夢影』第22回の梅瑟卿の5首はそれぞれ『天遊閣集』詩6の「小遊仙効西昆体」及び「以文擬閨詩四題各限韻」によると指摘される。
- 9) 趙建忠：『紅樓夢続書研究』、天津古籍出版社、1997年9月、99-102頁。
- 10) 王旭川：『中国小説続書研究』、学林出版社、2004年5月、322頁。
- 11) 張雲：「『紅樓夢影』的叙事策略」、『紅樓夢學刊』2012年第2輯、63頁。
- 12) 本稿で『紅樓夢影』原作の引用は、復旦大學圖書館所蔵の光緒三年丁丑聚珍本による影印(『古本小説集成』、上海古籍出版社、1990年)による。
- 13) 岳凌：「由『紅樓夢影』之賈宝玉反觀顧太清的情縁觀」、『名作欣賞』2015年5月、48頁。
- 14) 李栄：「冠蓋滿京華 斯人暗憔悴——『紅樓夢影』中賈宝玉形象研究」、『哈爾濱学院学報』2011年10月、55頁。
- 15) 前掲注7、276頁。
- 16) 前掲注7、272頁。
- 17) 前掲注2の金啟琮「満州女詩人顧太清和東海漁歌」、795頁。
- 18) 前掲注2の金啟琮「満州女詩人顧太清和東海漁歌」、798頁。
- 19) 前掲注7、280頁。
- 20) 前掲注5、193-196頁。
- 21) 前掲注11、68頁。
- 22) 譚鳳嬌・劉奇玉「從『紅樓夢影』中看史湘雲背后的顧太清」(『湖南社会科学』2014年第3期)では「怪物」がめでたいことを表さないと指摘する。「怪物」は確かに怪異で不思議なものという意味を持つが、『禮記・祭法』には「山林川谷丘陵、能出雲為風雨、見怪物、皆曰神」とあり、孔穎達疏には「怪物、慶雲之属也」とある。また『列子・湯問』には「慶雲、甘露降」とあり、『漢書・天文志』には「慶雲見、喜气也」とある。『紅樓夢影』の作中の描写から見て、ここでの「怪物」は吉祥や慶事を予示する宝物と看做すべきである。
- 23) 前掲注7、272頁。
- 24) 前掲注5、205頁。
- 25) 前掲注11、66頁。